

Title	連帯する哲学と政治 : 後期メルロ=ポンティにおける「哲学の観念」と政治
Author(s)	西村, 高宏
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 33 p55-p.68
Issue Date	1999-12
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12523">https://hdl.handle.net/11094/12523</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 連帯する哲学と政治

——後期メルロロポソティにおける「哲学の観念」と政治——

西 村 高 宏

## はじめに

思考の領域に属す哲学は、事実的状况において展開される具体的な行動領域に属す政治と、はたしてどのようなかたちで係わるのか。あるいは、哲学者が真に哲学者としての条件を充たしつつ、領域の異なる具体的な政治活動に参加するには、はたしてどのような態度変更が要請されてくるのか。否、そもそも哲学は政治に対して如何なる哲学的問いを挿し込むことができるのか。もし哲学が、具体的な事実的世界からは果てしなく遠ざかり、世界性を完全に喪失した形而上学的思考形態のみであるとするならば、所詮哲学が政治に対して為せることと言えば、飽くまでそれは政治についての思考でしかなく、どこまでいっても政治そのものへと係わることはできない。そしてそこには、一見したところ取り繕えそうもないほどの「断絶 (rupture)」が横たわることとなる。

55 事実メルロロポソティ自身も、彼が一九六〇年に執筆した『シーニュ』序文の冒頭で、哲学と政治とのあいだに

おける齟齬を仄めかすような屈折した文章を残している。しかしながらわれわれは、すぐさまそれを、メルロー・ポンティによる「哲学と政治との分離の確認」として理解すべきではない。というのも、その一方でメルロー・ポンティは、一九六〇年十二月三十一日付けの『ル・モンド』紙に掲載された最後のインタビューのなかで、「哲学と政治は連帯する (solidaire)」と明確に公言しているからである。<sup>①</sup>とはいえ、ここで言われている「連帯」とは、はたして如何なる事態を指し示しているのであろうか。それを明らかにすることが本稿の主題である。本稿では、敢えてその具体的な作業を、まさにこの「連帯」という言葉を改めてわれわれに想起させるような、「交渉 (fréquentation)」、「交叉配列 (chiasme)」などとといった、メルロー・ポンティ自身の知覚理論のうちに頻繁に見受けられるいくつかの鍵術語との照合をとおして展開していくことにしたい。と同時にこの作業は、常に「外的なもの (le dehors)」(S, 161)、もしくは世界との「交渉」をとおしてのみ自己の「哲学の観念」を「仕上げ (elaborer)」ようと試みてきた、前期から後期にかけてのメルロー・ポンティ自身の思想の移り変わりをたどり直す作業にもなる筈である。

## 一 交渉する哲学

如何なる政治的状况においてであれ、メルロー・ポンティは一貫して哲学と政治との「連帯」を公言して憚らかった。とはいうものの、彼自身がこの「連帯」という言葉の意味をより詳細なたちで提示してみせているわけではない。したがって、メルロー・ポンティの用いるこの「連帯」という言葉の意味を読み解くにあたって、さしあたりこの言葉をどのような切り口から考察すべきなのかが問題とされてこなければならぬ。そこで、この節ではまず、

その切り口となり得そうなものをメルロ＝ポンティ自身の哲学観のうちに求めながら、より具体的なかたちでその切り口なるものを提案してみることにしたい。

「決裂の証言」と銘打たれた一九五三年七月のサルトルとの往復書簡からもわかるように、ラオス侵攻や朝鮮戦争といった、当時の緊急事態をめぐるサルトルとの政治的見解の相違から、メルロ＝ポンティは『レ・タン・モデルヌ』誌を去った後は、当時の具体的な政治的状況への直接的言及からは幾分距離を保ちながら、もっぱらマルクス主義的歴史哲学の再検討にのみ力を注ぐようになる。このようなメルロ＝ポンティの後退的な態度に対し、書簡でサルトルは、メルロ＝ポンティが「自分の『哲学』をアリバイにして尻尾を巻いてしまった」として批判する<sup>②</sup>。サルトルがメルロ＝ポンティに対してこのように強く批判できるのも、そもそもサルトルにおいては、政治的状況と哲学との関係という問題意識自体がさほど重要視されていないからと言える。つまり、「決裂の証言」の序文を書いたフランソワ・エヴァルの言葉を借りて言えば、サルトルにとって問題なのは、「哲学か政治かのどちらかを選ぶ(choix)」ということなのであり、哲学と政治との関係それ自体は改めて問題とはされていないということなのである。サルトルにとっては「選択」こそが最重要課題であった。つまり哲学か政治かの、あるいは「知識人の、ただ剥き出しで何の効力をも持たない純粹な反抗か、それとも共産党が体现する不透明で不浸透性の現実<sup>③</sup>に他ならない歴史の動きへの合流(adhesion)か」の二者択一こそが問題だったのである。

しかしながらメルロ＝ポンティは、なにもサルトルが言うように、「哲学をアリバイにして」具体的な政治から身を退き、もっぱら哲学的探究にのみその身を捧げたわけではなかった。事態はむしろその逆と言える。メルロ＝ポンティにおいて哲学は、ただ単に政治から逃げ帰るための「アリバイ」などでは決してあり得なかった。なぜな

らメルローポンティは、まさにこの具体的な政治そのものより深く係わっていくためにこそ、「哲学の観念」を「仕上げ」ようと試みていたからである。というのも、メルローポンティは、哲学が、共産主義と反共産主義とのあいだで結ばれた「にせの結び目」(S, 10)に象徴されるような、錯綜した「現代政治」そのもののうちに「自由に入る」ことができる「ためには、何にもまして、それが可能な「哲学の観念」そのものをさしあたり「仕上げる」こと、あるいはそれを「学ぶ」ことこそが最重要課題であると考えていたからである。しかしながら、その際にこの「哲学の観念」は、ただ単に「哲学者と真理との対談」(EP, 44)によってのみ「仕上げ」られるようなものでは決してあり得なかった。なぜなら、メルローポンティにおいて哲学は、つねに既に存在と時間の手前に無傷なままで居座る、あの「一つの不死身の主観性」(PP, IV)による俯瞰的な視線のもので、「生活や世界や歴史に対して上から下される判断」(EP, 44)、すなわち「上空飛翔的な思考」などでは決してあり得ないものだからなのである。というのも、メルローポンティにおいては、哲学といえども「歴史的に生成された意味を必ず負わされて」(S, 163)いるのであり、またそれは、「哲学者自身やその時代の上に振りかかる一切の事柄に養われて生きる」(S, 161)もこのとして理解されているからなのである。哲学の住処は、まさにこの生活や歴史や世界といった「事実」のうちにこそ潜んでいるものなのであって、これら「生活の感染(contagion de la vie)」から守られている領分」(S, 163)など、もはやこの「哲学の観念」のうちには到底見出し出すことなどできないのである。

「哲学は歴史や生活を住処とする(habiter)」(EP, 79)。これまでみてきたように、メルローポンティにおいて哲学はそのように理解される。だからこそメルローポンティにとっては、何にもまして哲学をその住処である生活や歴史といった「事実」と、あるいは「個人的および社会的歴史」といった「外的なもの」などと「交渉(tré-

「quantation/commercier」させることこそが最も重要な課題として自らに要請されてくることになるのである。このようなことから、ここでは、メルロ＝ポンティにおける哲学と政治との「連帯」の意味を、この哲学の「対世界交渉」的な性格を切り口として考察することがのぞましいように思える。事実メルロ＝ポンティは、たとえば後期において、「弁証法」なるものを「 $\wedge$ 存在 $\vee$ 」の中で $\wedge$ 存在 $\vee$ に接触しながら働きつつある思考として「捉え返そうとする際にも、「思考」のその「 $\wedge$ 存在 $\vee$ 」への「交渉」のあり方を、まさにこの「連帯性」(VI, 125)といった言葉をもとに問題にしようとしているからである。そこで、当然のことながら次に問題となるのは、このメルロ＝ポンティにおける「交渉」なるものが、具体的にはどのようなかたちをもとに展開されていくのかということであろう。たとえば、「決裂の証言」におけるメルロ＝ポンティの書簡のうちにも見出せるように、メルロ＝ポンティが哲学と政治との「悪しき連帯」を問題にしていたときにも、「交渉」は、常に「哲学と政治の関係についての『古典的な』考え方」、すなわち「哲学はあらゆるものを所有 (possession) するから政治もそこに含まれる」筈であるという考えに抗いつつも、むしろその「所有」といった術語をもとに考察し直されていくことから、どうやらここでも、この「交渉」なるものを対象の「所有」といった観点から考察することが望ましいように思える。したがって次の節では、この「所有」といった切り口をもとに、メルロ＝ポンティにおける「交渉」の具体的な姿を明らかにしてみることにはしたい。ここでは、常に対象と交わされる「交渉」の際に、一貫して「距離を保つ (distance)」 $\wedge$ とを自らに要請して憚らなかつた、メルロ＝ポンティにおける徹底した「交渉」の在り方そのものが明るみに出されてくる筈であろう。なぜなら、メルロ＝ポンティにおいては、対象そのものの絶対的な「所有」(絶対的な真理経験)、つまりは対象との完全な「合一 (coincidence)」なるものは到底不可能な事柄であると見

做されているからである。メルロー・ポンティにおいては完全な「所有」・「合一」はあり得ない。だからといって、それがすぐさま「断絶」や「分離」へと裏返って理解されることも決してあり得ない。なぜなら、メルロー・ポンティにおけるこの「連帯」や「交渉」のもつ真意は、むしろその相対する「合一」と「分離」との両者から、ともに足下をすくわれないうところにこそ見いだされるべきものだからなのである。

## 二 距離を保ちながらの交渉

それが実存論的な視点から捉えられるにせよ、構造、もしくは存在論的な視点から捉えられるにせよ、メルロー・ポンティは対象との「交渉」を「距離」という概念を軸に考察していく。たとえば、『世界の散文』において真理論との関係から導きだされた、世界と身体との「距離を置いた所有」の関係。また一九五三年に、メルロー・ポンティがコレージュ・ドゥ・フランスの就任講演において、自己の哲学をベルグソンの哲学に準え、「表現としての哲学 (philosophie de l'expression)」(EP, 41)と性格づけたうえで提示してみた、哲学とそれによって表現されたものとのあいだにおける「距離を保ちながらの所有」(EP, 79)の関係。あるいはまた、後期のメルロー・ポンティが自己の視覚論の性格として提示してみた、見るものと見えるものとのあいだの「距離を置いての所有」(OE, 27)の関係。そしてさらには、本稿の主題とも関係のある哲学と政治とのあいだにおいて設定される「距離を置いた働きかけ」(S, 20)という相互間の関係など、メルロー・ポンティの哲学のうちには「距離を保ちながら」対象へと係わりとうとする態度が頻繁に見取ることができる。メルロー・ポンティが頻繁に見せるそのような態度は、その対象がどのような性格を持つにしる、対象への係わり、つまり「交渉」を執り行う際には、なにかこの「距離

を保つこと」が自己の哲学においては本質的なことなのだとでも言わなければならぬに迫ってくるものである。このように、メルローポンティの哲学においては、対象との「交渉」の際に常に一定の「距離を保つ」ことが求められていた。とはいえ、ある対象と「交渉」する際に、何故われわれにはこのように「距離を置く」ことが求められなければならないのであろうか。その問いに対するこたえを、ここではメルローポンティにおける視覚理論のうちに探り当ててみることにしたい。

メルローポンティは、自己の視覚論のうちに如何にしても「距離を保つ」ことを要請する。言い換えればそれは、徹底して△距離がない▽状態を忌避する態度とも言える。とはいうものの、そうした構えのなかで、はたしてメルローポンティは如何なる事態から逃れようとしていたのであろうか。

視覚において△距離がない▽と言う場合、メルローポンティはどのような事態を念頭に置いているのか。それは、この事実的で具体的な世界のうちで、「実際に起こっている視覚」(OE, 54)をまったく考慮に入れない視覚モデル、すなわち、具体的な対象との「交渉」をまったく執り行わないような、デカルトによる「対象のない知覚」(OE, 36)モデルなのである。デカルトにおいては、具体的な「視覚と密着して行こうとする心遣いはまったくない」(*ibid.*)。デカルトは、まさにメルローポンティとは異なり、「私が何らかの感覚器官を持つこと、何らかの身体を持つこと」をすべて忌避することを自己の視覚論の出発点とした。そうすることでデカルトは、この事実的な世界のうちでわれわれが繰り広げる具体的な視覚、すなわち「物の中で暮らしている視覚」いっさいについての分析を関心の外に置き、ただ「見ていると考えること」(*pensée de voir*) (OE, 54)を視覚そのものと同一視するに至るのである。いわばデカルトは、「自分の作ったモデルに従って△見えるもの▽を再構成」(OE, 36)しよう



としたと言える。このことをより具体的に言えば、デカルトは、視覚を自己の反省による感覚的所与の内在化として、徹底して自己自身のうちで展開しようとしたのである。そして、ここでは、対象との完全な「合一」、すなわち絶対的な対象の「所有」なるものが想定されていることは改めて言うまでもない。

しかしながら、われわれが人身体をもつVということを軸に自己の視覚論を展開していったメルロ＝ポンティにとっては、当然のことながらデカルトの視覚論のように、反省による対象の絶対的な「所有」もしくは「再構成」などは、到底不可能な事柄と見做される。というのもそれは、この人身体をもつVということによって、われわれがひとつの具体的な場所のうちに状況づけられ、われわれにとって知覚対象が、常にある種の「展望性」のもとでしか与えられないからなのである。そういった意味からすれば、視覚は、おのれの中核に根本的な「無力さ・鈍さ (pesanteur)」(OE, 52) を抱え込んでいると言える。だからこそ視覚は、世界を一気に眺め遣り、対象を俯瞰することなど到底できず、鈍滞で「跛行的なもの」とならざるを得ないのである。

このように、人身体をもつVということを通じて、この世界の内奥に深く繋がれているわれわれにとつては、このひとつの「展望」というとりあえずの対象の「所有」が、いつか対象そのものの絶対的な「所有」(絶対的な真理経験) もしくは「合一」へと至るであろうといった期待を潔く断念する他ない。ここでは、われわれは、最初に与えられた「展望」を「臆見」としてとりあえず「引き受け (assumer)」としてそれを再び「取り上げ直す (reprendre)」という際限なき「修復 (reprise)」・「訂正」の作業をとおして、「後で再び確認するという条件付き」(PP, 454) の、しかも常に「懐疑」を被り得るような留保付きの「確実性 (certitude)」を確保する以外に何ら為す術を持たないのである。だからこそメルロ＝ポンティにおいては、絶対的な「確実性」の「所有」もしくは

は対象そのものといった観念からは常に「距離を保ちながら」、そのつどそのつど対象を「所有」し直さざるを得ないということになるのである。この手続きこそが、まさにメルローポンティにおける「距離を保ち」ながらの「交渉」の具体的なあり方である。そしてまた、当然この「交渉」のあり方は、哲学が歴史に関する理解をとおして政治と「交渉」する際の、極めて重要なモデルとして理解されるものなのでもある。「真の「行動への」参与 (engagement) —— それはまたつねに真理への参与でもあるわけだが —— をなしうるためには、(何にもまして) 距離をとり (prendre recul) ことができなくてはならない」のである (EP, 81)。

### 三 交渉から交叉へ

哲学は、「距離を保ちながら (対象を) 所有する」。このように定式化される哲学の具体的な「交渉」のあり方に従うなら、メルローポンティにおける歴史と哲学との関係においては、一方で哲学を「絶対知」とし、それが歴史というもの「普遍的ですっかり理解され、完成されてしまった」ものとして「所有」することなど決して起り得ないこととされる。もはやそこでは、哲学と言えども、歴史を貫く永遠の真理、すなわち「孤独な真理」(EP, 46)を携えた「歴史の主人」(S, 20)として、政治の動きを俯瞰的に一気に眺め遣ることなどできない。なぜなら、そもそも本当の歴史とは、「純粹の事実あるいは出来事なのであって、おのれの組み込まれるべき体系の中に内的運動を導き入れ、それを打ち破ろうとする」(EP, 66)ものだからなのであり、ひとつの歴史的な「事件がその顔つきを見せた瞬間に、(歴史が持つ) 狡猾なメカニズムがこれをくすねとる (escamoter)」(S, 7)といった、極めて捉え難い性格のものだからなのである。メルローポンティが、「政治においては、たえず道をつけ直さねばなら

ないといった重苦しい感じがしてしまう」(ibid.)とまで告白するのは、まさにこの意味においてと言える。だからこそメルロ・ポンティは、哲学が、逐一政治と「交渉」し続けなければならないと考えるのである。そして、具体的にその「交渉」のあり方は、断片的にしか与えられない「歴史の意味」を、そしてまた「一歩ごとに逸脱の危機に晒されている」(AD, 61)「歴史の意味(方向)」を、常に、延々と「解釈し直す」(ibid.)といったかたちでしか展開され得ないものとなる。しかしながらわれわれは、哲学が政治との「交渉」を自らに要請することのような事態を、すぐさま哲学と政治とのあいだにおける「連帯」の関係そのもののあり方として理解することは許されない。というのも、そもそもメルロ・ポンティにおいては、哲学とそれが「交渉」する対象との関係が、哲学からその対象への一方向的な関係においてのみ捉えられるようなものでは決してあり得ないからである。なぜなら、メルロ・ポンティは、哲学の具体的な「交渉」のあり方を「距離を保ちながらの所有」として定式化してみせたコレージュ・ドゥ・フランスでの講演のなかで、「哲学者と存在との関係は、眺めるものと眺められるものとの向き合った関係ではなく、それは共犯(complicité)のようなものであり、まともでない怪しげな関係」(EP, 24)であるとして、ベルグソンの哲学に寄り添いながら、哲学と対象との関係のうちに相互作用的な関係の側面を読み取るとしているからである。そこでメルロ・ポンティは、相対するものどうしの関係を、互いに「交換し合い、互いに一方が他方に変貌し合い、真理の閃きが透いて見えるようになっていく」(EP, 43)関係性として捉えようとするのである。哲学とその対象とのあいだにおけるこのような「交換」・「変貌」の関係は、メルロ・ポンティの哲学が、後期における「肉」の存在論へと徐々に深化していくにつれて、よりいっそう顕著なたちでたちあらわれてくることになる。そして、当然それとともに、「交渉」といったこの哲学の対象への係わりかたのものにも大幅な修

正が加えられていく。

後期の主著である『見えるものと見えないもの』のなかで、われわれは、メルローポンティが「連帯性」という言葉を、後期メルローポンティの存在論における重要な鍵術語のひとつである「絡み合い (entrelacement)」（VI, 158）と、極めて並列的なかたちで用いている興味深い箇所を見出すことができる。つまり、後期においてメルローポンティは、最終的に「連帯」を「絡み合い」といった関係性と同様な働きのうちに位置づけようとしていたと言える。ちなみにこの「絡み合い」とは、たとえば見るものと見えるものといった互いに異なった性質のものが、「互いに相手の周りを巡り、互いに相手の領分を犯し合うような」、つまり単なる「换位 (renversement)」とは異なるかたちでお互いを「蚕食 (empiètement)」し合い、また、それを通じて互いの存在を支え合うような「相互着生 (insertion réciproque)」（VI, 182）的な関係のことである。この相互の「蚕食」作用をとおして、各々は相互にその存在を「交叉」させ、「互いに纏れ合い (se brouiller)」、「編みあわせ」れる。一方が他方を「包み」つつ、自身が包み込んだ他方に「包まれる」。メルローポンティは、「連帯」といった言葉のなかに、まさにそのような「包み——包まれる」といった「相互内属 (Ineinander)」的な関係のあり方を読み取るうとしていたと言える。そして、さらにメルローポンティは、哲学と政治との関係そのものにおいても、われわれはこの「相互の蚕食作用の上手な利用法」(S, 20) を、とりわけ「哲学をさらに学ばなければならない」(ibid.) として、それを「相互着生」・「相互内属」の観点から捉えることを自らに要請するのである。この段階において、メルローポンティにおける哲学の政治への「交渉」のあり方は、「絡み合い」の関係、つまりよりメルローポンティ的な表現を用いて言えば、「交叉配列 (chiasme)」の関係として解釈し直されていると言える。ちなみに、ここで言われて

いる「交叉配列の観念」とは、「存在へのすべての関係は捉えると同時に捉えられることであり、捉える働きが捉えられ、書き込まれる、それもおのれが捉えるその同じ存在に書き込まれる」(VI, 319)といった関係のことである。そして、これを「所有」といった視点から言い直せば、一方が他方を「所有」しうるのは、それが他方に「所有」され、それに拠って存在しているから」(VI, 178)ということになるであろう。

これまでは、哲学の政治への「交渉」の具体的なあり方が、「距離を保ちながら(対象を)所有」することとして定式化された。しかしながらここでは、哲学が政治を「所有」し得るのは、それが政治によって「所有」されているから、つまり政治に「拠って存在している」からとして言い換えられる。より具体的に言えばそれは、哲学もまたそれが捉えようとするもの、つまりここでは政治に媒介されつつはじめて生成し得るものになるということなのである。哲学もひとつの状況の産物、つまりはひとつの状況内的な思考であってみれば、自らのうちに当然政治的な側面を抱え込まざるを得ないのである。メルローポンティにおいて「連帯」とは、まさにそういった事柄を指し示していると言える。ここにおいて「交渉」は、まさに互いが「交叉」する「相互蚕食」的なあり方へと完全に組み替えられている。そして、最終的にメルローポンティは、一九六〇年十一月付けの研究ノートの中で、まさにこのような「交叉配列の観念」から出発して「哲学の観念を仕上げること」(VI, 319)をも自らに要請するのである。

このように、哲学と政治との関係、そして「哲学の観念」そのものまでもが、この「交叉配列の観念」によって捉え返された場合、もはやその両者のあいだには「絶対的な差異」(*ibid.*)なるものは断じて存在し得ないこととなる。というのも、もはや、このとき「哲学は全面的かつ能動的は把握、さらには知的所有」(*ibid.*)などでは決

してあり得ないからなのであり、哲学は、自らが捉えようとする当の政治によって捉え返されることをとおして、はじめて政治そのものを捉えることができるようにおのれ自身を遅くしていくものだからなのである。このように、後期メルロ＝ポンティにおいて「哲学とは、(まさに)捉えることと捉えられることとを、あらゆるレベルで同時に体験すること」(ibid.)として理解されるのであり、そして、最終的に「哲学の観念」なるものも、哲学と政治のいずれの面にも属しているようなものとして「仕上げ」られていくことになるのである。

### おわりに

以上のように、本稿では、メルロ＝ポンティにおける哲学と政治との「連帯」の真意を、ヘーゲルやマルクスなどの歴史観との比較・検証に拠らず、むしろメルロ＝ポンティ自身による知覚理論のうちにその真意を読み解くことを試みた。今後は、その知覚理論によって支えられた、この哲学と政治との「交叉配列」としての「連帯」のあり方が、具体的にメルロ＝ポンティの政治への係わり方にどのように反映されているのかをさらに検証してみる必要がある。そのように、議論をより具体的な状況へと接続していくことで、一層メルロ＝ポンティにおける「連帯」の真意が明らかになる筈である。

### 注

本稿においては、メルロ＝ポンティの著作について以下のような略号を用いた。引用に際しては、文中で次の略号の後に原書頁(アラビア数字)を表記した。

- P.P. *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, Paris, 1945.  
 F.P. *Éloge de la philosophie*, Gallimard, Paris, 1953.  
 AD: *Les aventures de la dialectique*, Gallimard, Paris, 1955.  
 S : *Signes*, Gallimard, Paris, 1960.  
 OE: *L'Être et l'Esprit*, Gallimard, Paris, 1964.  
 VI: *Le Visible et l'Invisible*, Gallimard, Paris, 1964.  
 (1) Cf. Jean-paul Weber, Un entretien avec Maurice Merleau-Ponty: La philosophie et la politique sont solidaires, dans *Le monde*, Dec.31, 1960, p.9.  
 (2) Cf.Sartre, Merleau-Ponty, Les lettres d'un rupture, dans *Magazine littéraire*, 320, 1994, p.71.／菅野盾樹・能川元一訳「決裂の証言」『みすず』四〇七・四〇八、一九九五年。  
 (3) Cf. Anna Boschetti, *Sartre et «les Temps modernes»*, les éiton de minuit, 1985, p.259.

(大学院後期課程学生)